

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第966号 平成27年7月17日

## 微笑の起源

京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授によると、人間の「笑い」と「ほほ笑み」は進化の起源が違うのだそうです。

「笑い」は、ワハッハッハと口を大きく開ける。これはサル類の「遊びの顔」に由来しており、一方の、「ほほ笑み」は、唇を真横に引いて、端をきゅっと上につりあげる。これは、サル類に共通した「恐れ顔」に由来するとしています（5月24日付日本経済新聞から）。

松沢教授によると、ニホンザルは上位の者が近づくと下位の者は歯茎を剥き出しにした恐れ顔の表情をする。悲鳴を上げるような表情を見せる事で、自分の方が劣位である事を相手に示すのだそうですが、人間はこれを更に一歩進めて、恐れがなくても相手の顔を見ながら前もってこの表情を示す事で、「敵意がない事」「仲良くしよう」という信号を発しているといえます。

こうしてみると、「ほほ笑む」というのは、「笑」という字を使ってはいませんが、いわゆる「笑い」ではないという事になります。

マリアン・ラフランスという人（イエール大学の教授）は、「微笑のたくらみ」という本の中で、笑顔を科学的に分析し、笑顔が持っている意味や力を解き明かしてくれています。

マリアン教授は、笑顔には2種類あると指摘しています。即ち、口角を引く事で作られる単純な笑顔と、口角が上がり、頬がもち上がる事が組み合わさった笑顔です。

そして、マリアン教授は、この2つの笑顔について、19世紀に笑顔について研究した生理学者のデュシェンヌ・ド・ブローニュという人の「最初の笑顔は意志に従うものであり、第二のものは心の底からの甘い感情によって作動するものである」という言葉を引用しつつ、自発的な笑顔を「デュシェンヌ型の笑顔」、口角の収縮だけを伴った笑顔を「非デュシェンヌ型の笑顔」、若しくは「社会的笑顔」と称しています。

顔は笑っていても目は笑っていないという場合がありますから、一口に笑いといってもそこには複雑な感情が込められているのだと思います。

こうして見ると、「ほほ笑み」というのは「非デュシェンヌ型の笑顔」の範疇に入

るのかも知れません。しかし、初対面の人とお会いして、相手の「ほほ笑み」の表情を、これは「非デュシェンヌ型の笑顔」だろうかといちいち考え始めたら、少々味気ない感じがします。

ところで、「笑」という字使った熟語は沢山ありますが、その一部を紹介しますと、「艶笑」「哄笑」「爆笑」「談笑」というのは「デュシェンヌ型」の笑いといって良いでしょう。それに対して、「苦笑」「微苦笑」「微笑」は、「非デュシェンヌ型」といって良さそうです。

「嘲笑」「憫笑」「冷笑」「失笑」となるとどうでしょうか。私は、こうした笑いは「非デュシェンヌ型」に近いような気がします。

「微笑」は「びしょう」とも「ほほ笑み」とも読ませますが、「ほほ笑み」といえば、「モナリザ」や京都広隆寺の「弥勒菩薩」が有名で、「アルカイック・スマイル」の代表です。それでは、この「ほほ笑み」は、果たしてどう受け止めたらよいのでしょうか。「モナリザ」は知らず「弥勒菩薩」の「微笑」には、慈悲という廣大無辺の人間に対する愛が感じられ、「デュシェンヌ型」「非デュシェンヌ型」のいずれをも超えたものと私には感じられます。

ところで、「笑う」事と「ほほ笑む」事はその成り立ちは違うのに、どうしてもどちらにも「笑」という字が使われているのでしょうか。皆さんは、こんな疑問を感じた事はありませんか。

この私の拙い疑問に、民俗学者の柳田国男氏は「女の<sup>えかお</sup>咲顔」という一文の中で、一つの答えを示してくれていますので、私なりに紐解いてみたいと思います。

「ほほ笑む」の元を辿れば、女性の「えくぼ」に辿り着くようです。「えくぼ」は平たい表面の窪みに過ぎませんが、昔から「えくぼ」のある娘は愛されているので、親は我が児の頬に「えくぼ」の出来る事を願います。

柳田氏は、このように親が我が児の頬に「えくぼ」の出来る事を祈り求めたのは、「えくぼ」は「咲顔」即ち「エガホ」の紛う方なき特徴となっているからだと言っています。

口角を少し上の方に引き上げるようにすると「えくぼ」が出来易くなりますが、この「えくぼ」のある顔を想像すると、マリアン教授が分類した「非デュシェンヌ型の笑顔」に似ているとは思いませんか。そして、この「エガホ」を作る状態が「エム」という事になるのだと思います。

「エム」というのは、柔らかなものが乾いてひびが入った状態を示しており、対して「ワラフ（笑う）」というのは「割る」という語から枝分かれして出たもののようです。柳田氏は、「ワラフ（笑う）」は口を大きく開け、優しい気持ちを伴わぬもの、結果がどうなるか考えないが、「エム」には如何なる場合にもそういう事がない、と述べています。また、「ワラヒ」には必ず声があり、「エミ」には少しでも声はない

とも述べています。

柳田氏は、「ワラフ」と「エム」という二つの動詞の差別がはっきりしないために、「笑う」にも「ほほ笑む」にも「笑」や「咲」という字を当てて混同しているが、それは、「エミ」を「ワラヒ」の未完成なもの、花なら蕾か何かのごとくに思っている人が多かったからと指摘すると共に、自分は「笑」と「咲」とを別々に取り扱って、「えがお」は「咲顔」という書く事にしていると述べています。

なお、柳田氏は、「微笑」を「ほほえみ」と表現するのは、ホホと声を出して笑うからではなく、頬に「エマヒ」即ち「えくぼ」がまず現われるところから来ている、としています。

柳田氏の説に共感する私としては、これからは「えがお」は「咲顔」と、「ほほえむ」は「ほほ咲む」と表現しようかと思っているところです。

ところで、柳田氏は、「女の咲顔」の中で、人生のいわゆる笑えない現実に入っていくと、「いつとはなしに声を立てて笑う癖は消え、ニコニコ顔だけを持ち伝える者が多くなる」と指摘しています。確かに、今の世の中を見渡してみれば、閉塞感が漂い、腹の底から口を開けて笑う事が少なくなっているように感じます。健康な笑いが消えてしまう事の無いように、願って止みません。

(塾頭 吉田洋一)